

第5章

事業の評価

団 長 報 告

事業評価アンケート

総 括 評 価

団 長 報 告

2024年度 テーマⅠ：再生可能エネルギー モロッコ派遣

工藤 美香

はじめに

私が参加したモロッコへの派遣団は、「再生可能エネルギー」(以下、再エネ)をメインピックとして活動を行った。

モロッコは、北アフリカの西、地中海と大西洋に面する国で、国土を横切る標高3,000-4,000メートル級のアトラス山脈、その南側にはサハラ砂漠があり、気候風土のバラエティに富んでいる。山や川、緑の豊富な地域と乾燥地帯が混在しており、スキーと海水浴を同時期に楽しめる街もあるという。しかしながら、現地在住者によると、近年は気候変動の影響により積雪量が年々減少している山もあり、景色も変化しているという。

モロッコのエネルギー事情は、日本と類似する点も多い。化石資源に乏しく、多くのエネルギーを他国からの輸入に依存してきた。エネルギー価格の高騰や世界の脱炭素の流れ、とりわけ隣接するEUとの経済関係を背景に、再エネの導入促進を始めとするエネルギー転換を積極的に進めている。日本も輸入化石燃料に依存しており、国際情勢を契機とするエネルギー価格高騰の影響を受ける中、エネルギー安全保障の観点からも、また国際社会に約束した気候危機対応としても、脱炭素社会への取組を活発化させている。他方、当然ながら異なる点もある。例えばモロッコは、降水量が非常に少なく太陽エネルギーの大規模活用が可能な広大な土地が存在すること、隣国(スペインほか)との国際連系線があり再エネ由来電力の活用にあたって柔軟性を提供していること(日本には隣国との国際連系線はない)、グリーン水素の製造・輸出を脱炭素政策の一つの軸としていることなどが挙げられる。

派遣団は、21歳から27歳までの12名の青年と、団長、副団長、渉外の15人で構成された。団員は、帰国後の国際青年交流会議でのディスカッションを念頭におき、上記のような国による違いも意識しながら、両国の再エネに関する政策や投資について様々な立場(国、市民、企業、研究者)の視点から事前に情報収集し、派遣国活動に臨んだ。なお、団員の1名が渡航直前の体調不良により渡航がかなわなかったことは、本人にとってはもちろん他の団員にとっても非常に残念な出来事であった。

今回の派遣国活動では、ラバト、ベンゲリル、マラケシュ、アガディールの4都市を訪問した。各都市間は高速バスでの長距離移動となったが、街から街への移動中に車窓から見える風景の変化は、モロッコの国土の多様性を知るとい機会となった。

ラバト

ラバトは2012年、「近代都市と歴史的都市が共存する首都」として世界文化遺産に登録されたモロッコの首都である。マグレブ地方の街の特徴を持ち古いイスラム建築も残る旧市街と、20世紀のフランス保護領時代に造られたヨーロッパの影響が色濃い新市街が隣接している。

派遣団は、古代ローマ時代からの遺構や12世紀に造られた巨大イスラム建築、17世紀に建造された城塞などを訪れた。これらの史跡は、大西洋とこれに流れ込むブルーグレグ川や町全体を見下ろせる小高い場所に位置しており、ラバトが古くから要衝であったことが理解できる。一方、新市街では、近代建築が並ぶ様子やトラムウェイが走る姿も目にした。古代ローマ時代から現代までのラバトの歴史と都市の変化を知る機会となった。

在モロッコ日本国大使館表敬訪問

ラバトでは、在モロッコ日本国大使館で倉光秀彰特命全権大使に表敬訪問する機会を得た。倉光大使からは、モロッコの政治・文化の概要のほか、再エネ政策とその背景、EUとの経済関係、日本企業の投資などについてお話を伺い、派遣国活動で活きる知識や視点を得ることができた。表敬訪問の後は、大使館主催のレセプションに参加させていただいた。レセプションには、派遣国活動プログラムの策定に御尽力いただいた高等教育・科学研究・イノベーション省(以下、高等教育省)、エネルギー移行・持続可能開発省、MASEN(持続可能エネルギー庁)など訪問先関係者のほか、日本に招へいされるモロッコ青年も招かれており、帰国後の国際青年交流会議に向け親交を深めた。また団員は、文化交流の一環として、伝統的なダンスとしての『ソーラン節』とサブカルチャーとして人気のダンス『Bling-Bang-Bang-Born』を披露した。その模様は地元テレビ局が取材し、当日のアラビア語ニュース番組でも放映された。

高等教育省

高等教育省は大学以上の高等教育を管轄する省で、派遣国活動プログラムの主要部分を企画調整いただいた。訪問時には、高等教育の現状のほか、2030年までの高等教育改革計画について説明いただいた。その内容は多岐にわたるが、カリキュラム横断的な取組の一例として、大学教育の国際化とデジタル化がある。「国際化」では、第一外国語であるフランス語に加え、英語の学習の義務化とITを利用した英語学習環境の整備・提供に取り組んでいる。ま



50ディルハム札にはNoor Ouarzazateをはじめ再エネ施設がデザインされている

た、「デジタル化」では、学生がITを使いこなすスキルを身につける学習環境の充実化を行っている。

大学・大学院卒業生の進路をにらみ、教授候補生の育成や起業精神の涵養にも意識的に取り組むほか、外国人留学生も積極的に受け入れ、英語での講義・コースの増加にも力を入れている。高等教育を受けた学生が世界中の研究者等とつながりを持ち活躍できるよう、国際的な連携とその基礎となる語学・ITスキルの獲得に力を入れていることが理解できた。

エネルギー移行・持続可能開発省

同省では、初めに同省の建物内にあるエネルギー・鉱物博物館を見学し、モロッコの地質学関連の資料や研究について説明を受けた。

その後、同省の各部門から、エネルギー転換に向けた政策について説明いただいた。モロッコは、2030年までに45%の温室効果ガス削減目標を掲げ、再エネ、電化、農業、スマートシティの4分野に力を入れている。現在、情勢変化を受けた政策の見直しを行っているが、重点政策の策定に当たりステークホルダーの参加を重視しており、国・地方レベルでのワークショップや市民団体との対話のほか、パブリックコメントを集積するためのウェブフォームも開設している。再生可能エネルギー関連では、2030年までに電力部門で設備容量の52%を再生エネとする目標を掲げており、自家消費型の再エネ発電施設の新規導入促進、送電網の増強、規制改革、大規模再生可能エネルギー発電施設の拡充などに取り組んでいる。また、グリーン水素については、需要が見込まれる欧州市場の地理的近接性や再エネの大規模プロジェクト設置可能性を考慮し、製造から輸出までのバリューチェーン構築に向けた取組を進めている。その他、世界最大の埋蔵量といわれるリン鉱石を含む鉱物資源戦略、天然ガス戦略(長期的にはナイジェリアからアフリカ大陸の大西洋岸を囲むようにつなぐ天然ガスパイプライン計画など)、石炭火力発電フェーズアウトに向け

た取組なども学んだ。

派遣団からは、政策決定における市民意見の具体的な集約方法や、電力政策における石炭火力発電の位置づけについて質問し、短時間ながら活発な意見交換が行われた。

MASEN

MASENは2010年に設立された再エネの開発を行う政府出資の民間企業である。モロッコ国内には現在4.6ギガワットの再エネ発電施設があり、同社は今後4.5ギガワット以上の開発を計画している。風力発電や水力発電ポテンシャルも豊富だが、例えば水力については近年干ばつで水不足の影響も大きい。そのような中、賦存量の多い太陽エネルギーの活用を力を入れており、世界最大級の太陽熱発電所と太陽光発電所を併設するNoor Ouarzazateプロジェクトを建設、現在も拡充を進めている。

アフリカ諸国や欧州、中近東との国際的な連携も進めている。欧州数か国との間では「持続可能な電力取引ロードマップ」プロジェクトを組織し(欧州委員会や世界銀行、送電事業者などがパートナー)、スペイン、ポルトガル、アルジェリア、モーリタニアとの国際連系の強化や、電力取引を円滑化するための法的枠組・規制の共通化を議論している。また、アフリカ諸国との協働では、プロジェクトのリスクを低減し投資が促進されるよう、専門知識の提供(事業実現可能性調査の支援など)を行っている。

派遣団からは様々な質問が寄せられた。具体的には、MASENによるプロジェクトの事業者選定手続、再エネプロジェクトの国内経済に与える影響(国内サプライチェーンの構築)、大学の研究との連携、自然災害(地震、嵐、洪水等)による再生可能エネルギー施設の損傷と対応策、地域との関係(反対の有無、地域の便益や説明の内容など)などであった。日本との相違点や具体的な政策について理解を深めることができた有意義な意見交換となった。

ラバトでの日程を終え、次の目的地であるベンゲリルに

バスで移動した。

ベンゲリル—モハメッド6世工科大学

同大学は2013年に開校した大学である。初めに、キャンパス全体の説明を受けた後、図書館や持続可能エネルギー技術のための無機材料研究室を見学した。その後、材料科学・ナノ・エンジニアリング部門を訪問し、修士・博士課程の学生と研究者によるポスター形式のプレゼンテーションを通じたディスカッションの機会を得た。テーマは、蓄電池の材料や水素の活用、大気中の二酸化炭素を回収する技術、材料のリサイクルなど多岐にわたり、団員が各ポスターを訪れて学生からの説明や質疑応答で理解を深めた。

また、キャンパス近傍のグリーンエナジーパークと呼ばれる区域を訪問した。同施設は、大学での実証研究の一環として太陽光・太陽熱発電施設を備えるほか、様々な小規模居住施設(小さな家)を構えて、太陽エネルギーを利用した居住環境に関する実証実験を行っている。団員は実際に家の中に入り、素材やデザインによる断熱の違いなどを体験した。キャンパス内見学の終了後の夕食会には、博士課程の学生等の参加を得て意見・情報交換をした。

ベンゲリルからマラケシュへ

ベンゲリルからマラケシュに向かう途中では、モハメッド6世水文明博物館を訪れた。雨の少ない南部地域の貯水・灌漑施設の歴史と、現在の治水技術を学ぶことができる施設である。およそ1,000年前の、地下に溝を掘り水源から居住地まで水を引く技術から、現代の技術(大都市近郊の淡水化プラント、川と川をつなぐウォーターハイウェイ計画など)まで、学芸員の説明を受けながら展示を見て回った。水が豊富な日本とは異なる水利用の重要性を知ることができた。

マラケシュ市内では、ランドマークとされるクトゥビアの塔と近くの市場を訪れ、活気ある風景を垣間見た。

アガディール—イブン・ゾホル大学、スース・マッサ・イノベーション・シティ

アガディールでは、イブン・ゾホル大学を訪問した。学長・副学長との面会の機会をいただいた後、同大学が提携する「スース・マッサ・イノベーション・シティ」を訪れた。高等教育省ほか関係省庁が財政支援する公的機関で、5つの分野(農業、漁業、観光、流通、健康)での起業家支援拠点として、場所や機材、ノウハウの提供、スタートアップ企業の支援などを実施している。施設内には技術開発のための実験施設がある。派遣団は、同機関の活動概要について説明を受けた後、実験施設に移動し、研究者から研究内容の説明を受け、質疑応答を交えながら見学を行った。太陽エネルギーを利用した食品の乾燥プロセスの開発や、

地域の特産であるアルガンオイルを使った生分解プラスチックと製品開発等について、実物を見ながら話を聞くことができた。再エネ分野では、プラスチックの金属メッキや、モロッコ製の風力発電用タービンの技術開発に取り組まれているとのことである。なお、同大学で実施を予定していた学生とのディスカッションミーティングは、残念ながら開催されなかった。

同施設見学後は、団員が六つに分かれてホームステイ先に向かった。家庭では、モロッコの伝統料理、ファミリーによる伝統衣装の披露、団員が豪華な伝統衣装(カフタン)を着て記念撮影、あるいは海岸で一緒に遊ぶ、など、モロッコの文化や自然を感じた心に残るステイとなった。ある家庭では近時の中東情勢に関する会話もあり、世界に目を向ける重要性を再認識する機会ともなったようだ。

翌日は、ホストファミリーとともに集合して、町の北西部にあるアガディール・カスバ遺跡を訪れた。1960年アガディールを襲った大地震で旧カスバ(要塞のこと)も壊滅し、地震の爪痕が残る居住の跡をガイドの説明を聞きながら見て回った。そのほか、ホストファミリーの案内に従って、青果物や生活の品々を扱う市場、モロッコ南部地域でしか栽培されないアルガンの木やその実から取れるオイル、食べ物に関する博物館などを訪れ、ホームステイから続く形でアガディールの歴史や生活に触れることができた。

おわりに

再エネをメインテーマに臨んだ派遣国活動だったが、現地ではより広いテーマでの学びや交流の機会が多かった。私の個人的な経験ではあるが、国際的な交流事業では想定や予定とは異なる事象が起きることもままある。その要因や背景を考えるなど、そうした事象の中から学びを得ることも国際交流の経験として一つの糧になると考えたい。

帰国後の国際青年交流会議では、再エネを巡る政策や事情も、文化も異なる3か国(モロッコ、スペイン、日本)の青年が4チームに分かれ、2日間にわたって議論した。各チームとも1か月ほど前から、日本青年がイニシアティブを取り議論のテーマや進め方を提案して準備していたが、外国青年の受け止めは様々だったようで、いざディスカッションが始まってみるとチームの個性により様々な議論が展開していた。そのような中でも、日本青年は積極的かつ柔軟な対応で議論に参加し、成果物の作成に取り組んでいたのが印象的だった。

モロッコ派遣団は、年齢やバックグラウンドを問わずニックネームで呼びあい、全員がリーダーシップと柔軟性を発揮して課題をこなしていく絶妙なチームだった。優秀かつ高い目標を持った団員と10日間の派遣国活動で行動を共にし、また帰国後の国際青年交流会議や研修でこの間の成果を共有できたことは、私自身も大いに刺激を受けた貴重な経験となった。そして今、彼らの前の世代の者

として、気候危機が深刻化する現状に対する責任とエネルギー転換を進める責務の重さを、より一層感じている。

最後に、内閣府青年国際交流担当室、在モロッコ日本国大使館を始め、駐日本国モロッコ大使館、モロッコの関係省庁・機関の皆様、現地コーディネーターの方の御協力がなければ、今回の派遣国活動は実現しなかった。心から御礼申し上げたい。

団 長 報 告

2024年度 テーマⅡ：水と防災 ドミニカ共和国派遣

中野 元太

1. はじめに

ドミニカ共和国派遣団のテーマは「水と防災」である。まず本事業の全体日程を示しておきたい。7月3日から7月6日の事前研修(於 国立オリンピック記念青少年総合センター)、7月14日の団別研修とOB・OG意見交換会(於 オンライン)、8月3日の団別研修(於 オンライン)、9月7日のドミニカ共和国代表青年とのオンラインプレ会議(於 オンライン)、9月19日・20日の出発前研修(於 都市センターホテル)、9月20日から9月30日のドミニカ共和国派遣、10月1日から3日の国際青年交流会議(於 都市センターホテル及びホテルニューオータニ)、10月4日・5日の帰国後研修(於 都市センターホテル)、2月8日の事業報告会(於 オンライン)という構成で、日本参加青年は約1か月をともに過ごしたことになる。

次章以降は、事前研修、ドミニカ共和国での滞在、帰国後の国際青年交流会議に至るまでの活動や学び、日本参加青年らの様子を、「事前研修」、「ドミニカ共和国と日本とのつながりを学ぶ」、「水と防災」、「国際青年交流会議」の4つの観点から、全体を総括していきたい。

2. 事前研修

事前研修(7月3日から6日)が、団長、副団長、渉外、日本参加青年12名からなるドミニカ共和国派遣団の初顔合わせとなった。全員がスーツに身を包んだ開講式という厳かな雰囲気からか、それとも初対面の人に囲まれているからか、団長挨拶時に演台から見渡した団員の表情は、皆一様に強張っていた。同時に、このプログラムへの期待と真剣に取り組もうとする決意の表情にも見えた。

4日間に渡る事前研修は、内閣府からの事業説明、団員の関係性を深めるチームビルディング講義、駐日ドミニカ共和国大使館表敬訪問、英語ディスカッション講座、元・在ドミニカ共和国日本大使や団長による専門的講義から構成された。大使館表敬訪問では、日系人で初めて駐日ドミニカ共和国特命全権大使となった高田ロバート大使が時に日本語も交えながら温かく団員らを迎え入れ、緊張で背筋が伸びた日本参加青年代表による挨拶にも熱心に耳を傾けてくれた。そして、国際社会青年育成事業がドミニカ共和国と日本との交流の一翼を担っており、高い期待を寄せているとお話があった。

事前研修中は多くの時間が団別研修に充てられた。団別研修とは、日本参加青年らが、団目標や「水と防災」のディスカッションテーマ、ドミニカ共和国滞在中やその後の国際青年交流会議で披露する文化紹介の内容について、

参加青年同士で主体的に話し合って決める場である。3日間かけて決めた「旅鳥～繋がり、高め、羽ばたく私達～」という団別目標は、深い繋がりを持ち、多様な価値観を持つ青年間で高め合い、旅の後もより高めへと羽ばたくという思いが込められている。文化紹介では、高知を中心に全国に広がりを見せている「よさこい踊り」、日本文化を紹介するスライド資料、そして「カントリーロード」を歌うことが決まった。

閉講式で壇上から見た日本参加青年の表情は、年齢も立場も異なる12名で意思決定し、一つのことを成していくことの難しさに戸惑いを隠しきれていないようにも見え、青年らにとっては不安もあったのかもしれない。一方で、団長としては成長のチャンスを秘めているように見え、青年らがどのように変化していくのか、楽しみとともに事前研修を終えた。

3. ドミニカ共和国と日本とのつながりを学ぶ

9月20日に羽田空港を出発し、経由地ニューアークで一泊した後、9月22日に首都サントドミンゴに到着した。青空が広がり日差しが降り注ぐ。機窓からはイメージ通りのエメラルドグリーンのカリブ海が見えた。空港にて、現地コーディネータのジョエル・テハダ氏の出迎えを受けた。

9月23日は、国際社会青年育成事業の相手国受入機関である青年省表敬訪問である。日本参加青年らは、時差の影響よりも交流への期待が上回っていたようで、元気な様子だった。青年省の建物に入り、洒落た螺旋階段を上ると、カルロス・バルデス青年大臣を始め、3名の副大臣級を含む多くの省関係者が出迎えてくれた。また在ドミニカ共和国日本国大使館の伊藤光一等書記官も同席してくれた。バルデス大臣は33歳にして青年大臣という要職に就いており、今後の政界を担うことが期待される若手のホープである。バルデス大臣は日本参加青年に自ら歩み寄って話しかけ、一緒に写真を撮り、SNSアカウントを交換し、青年と直接メッセージを送り合っていた。

国際社会青年育成事業の重要性を、バルデス大臣はその態度で表してくれたことが非常にありがたい。この日、9月23日は、午前10時に日本参加青年を青年省で受け入れてくれた後、12時からバルデス大臣主催の昼食会が開催された。そして、18時から在ドミニカ共和国日本国大使館主催のレセプションが開催され、ここにもバルデス大臣は出席し、丸テーブルを日本参加青年らと囲んで食事を楽しんでいる。大臣は丸一日、日本参加青年との交流に時間を充ててくれたことになる。

こうした日本への友好的な態度が、ドミニカ共和国でどのように育まれてきたのかを感じる場面も多々あった。キーワードを挙げるなら、「日系移民」、「国際交流」、そして、「外交・支援」である。忘れてはならないのは、ドミニカ共和国は1956年から日本人農業移住が行われ、多くの日本人が困難に直面しながらもドミニカ共和国の人々と友好的な関係を築き、発展に尽力してきたという事実である。平成24年にはサントドミンゴ中心部に日本移民の功績を示すモニュメントが建立されており、我々も派遣団として同地を訪問し、献花を行った。ドミニカ共和国の人々による日本参加青年への温かいおもてなしは、海を渡った先人たちのお蔭である。

日系移民の関係性がベースにあって、ドミニカ共和国の青年と日本の青年との「国際交流」が長年に渡って続いてきている。これまでに何度も国際社会青年育成事業で日本参加青年を受け入れているサントドミンゴ自治大学(UASD)では、9月25日と26日の2日間に渡った交流プログラムが催された。日本参加青年は約25名のUASD学生らと5つのグループに分かれて「水と防災」をテーマとしたディスカッションを行い、25日の夕方には文化交流も行われた。よさこい踊りを披露し、UASD学生らも巻き込んだ大所帯で鳴子を鳴らした。UASDからはメレンゲも披露され、最後にはメレンゲレッスンと全員でのダンスセッションもあり、盛り上がりを見せた。

UASDでの交流を通して、日本参加青年らのホームステイへの期待はさらに高まったようであった。それもそのはずで、UASD学生の中にホームステイのホストファミリーもいたようで、9月27日のホームステイマッチングを待たずに、ホストファミリーとの交流が始まっていた。ホストファミリーは、過去の国際社会青年育成事業参加者らで構成されるADOINDEXや、日本への留学経験者で構成されるADEMON、そしてUASDの協力で募集が行われ、当初の想定よりも多い11家族がホームステイを受け入れてくれた。9月27日午後から28日午前にかけて、日本参加青年らはホストファミリーと過ごし、文化的施設を訪問したり、料理を一緒にしたり、歌って踊ったりと、ドミニカ共和国の文化・習慣への理解を深めたようである。

日本参加青年らは在ドミニカ共和国日本国大使公邸表敬訪問(9月27日)や、国際協力機構(JICA)ドミニカ共和国事務所訪問(9月26日)を通して、「外交・支援」の最前線にも触れている。大使公邸では、高木昌弘特命全権大使にドミニカ共和国滞在中の交流について報告し、高木大使からは日本企業のドミニカ共和国への進出といったビジネス面でのつながりについてお話があり、特に企業で働く日本参加青年らにとってはドミニカ共和国との今後のつながりを考えられる良い時間になったようである。また、JICA事務所では防災専門家による防災協力の説明や、JICA海外協力隊員との交流が行われた。協力隊員の職種は日本

語教師やエネルギー関係等様々であった。大使館職員やJICA関係者と交流できたことで、外交や国際支援に関わる職業が将来の選択肢の一つに加わったようであった。

4. 水と防災

今回のプログラムを通底するテーマが「水と防災」である。2024年は、平年よりもハリケーンの数が増えるとの想定であったが、派遣期間中は幸いにも悪天候の影響はほとんど受けなかった。唯一、ホームステイの初日であった9月27日に、一時的な大雨に降られたのみであった。

テーマに関連する最初の訪問地となったのは9月24日のバルデシアダムで、サントドミンゴ中心部から西に約40kmの山間部にある公営ダムである。都市の発展とともに需要が増加する電力や、乾季と雨季に分かれるドミニカ共和国では、特に乾季における都市部での飲料水確保が重要な課題となることから、同ダムは主に飲料水供給と水力発電機能を担っている。しかし、気候変動の影響によって同地域の降雨パターンが変化し降水量が減少しているほか、気温上昇に伴う水温上昇で藻類が異常増殖し、湖面は完全に緑色となっていた。さらに、ダム周辺では過剰な樹木伐採の一因もあってダムへの土砂流入量が増加し、ダム底に土砂が堆積し、ダムの貯水能力や運用に影響が出ているとの説明もあった。日本参加青年にとっては、専門的内容を英語で説明を聞く初めての機会となったが、ノートを取りながら、ダムの運用方式やわかりづらかった点の確認など、ダムの説明担当者に熱心に質問する姿も見られた。

ダム訪問の翌日にあたる9月25日には、災害対応の調整を担う緊急事態センター(COE)と、水資源庁(INDRHI)を訪問した。COEは、通常は縦割となっている省庁を横断的に調整し、効率的に災害対応を行うセンターであり、情報発信や警報伝達、救出・救助の調整や被害状況の把握といった対応を集約して行う。今後の気候変動に対応するためハリケーンの進路予測や雨量観測などより高い精度が求められているとの課題も教えてくれた。

前述のバルデシアダムはINDRHIの管轄であり、9月25日は同庁を訪問して、Olmedo Caba Romano長官の歓迎を受けた。同氏は、2010年から2024年までドアルテ州選出の国会議員を務めた人物である。その後、INDRHIが持つ、水の蒸発から降雨に至る水循環について理解を深めることができる市民向けミュージアムを案内してもらい、ノンフォーマル環境教育の一端を日本参加青年らは体験することができた。ドミニカ共和国での防災教育や環境教育に関心を持つ青年もいたため、これもよい学びの機会となった。

事前研修やドミニカ共和国派遣中の学びの成果が、9月26日に行われた日本参加青年とUASD学生との共同プレゼンテーションや、後述する帰国後の国際青年交流会

議での発表にも多く表れていた。それは端的に言えば、ドミニカ共和国と日本との間の産業構造や人口動態、大量発生しているサルガッサムという海藻の問題、大雨後に起こるデング熱の流行、など様々な違いに気づきながらも、気候変動に伴う降雨パターンの変化や海面上昇、異常高温といった共通の課題を有しているということへの気づきと、その解決に取り組もうとする積極的な意思の共有である。

5. 国際青年交流会議

9月30日、幸いにも大きく体調を崩す日本参加青年はおらず、無事に帰国した。10月1日から10月3日は、ドミニカ共和国およびモロッコに派遣された日本参加青年に加えて、ドミニカ共和国、ジャマイカ、モロッコ、スペインの外国参加青年らが来日し、3日間の国際青年交流会議において気候変動をテーマとしたディスカッションとその発表が行われた。そして大変光栄なことに天皇皇后両陛下もお越しになられている。

同会議では、ドミニカ共和国に派遣された日本参加青年12名はドミニカ共和国とジャマイカの外国参加青年らと4グループに分かれて、それぞれ、グループ1. 災害リスクマネジメント、グループ2. 水資源管理とインフラ、グループ3. 避難、グループ4. 復旧・復興のテーマについて議論を行った。ドミニカ共和国、ジャマイカ、日本、それぞれ社会・経済状況は異なるものの、ハリケーンや台風といった熱帯性低気圧の影響を受ける国であり、ここでもグループ1から4のテーマについて、課題の異同や解決策について熱心なディスカッションが行われた。ゴミの投げ捨てが排水能力を低下させ、洪水の原因になっているというジャマイカ青年の話や、日本において流域全体で洪水対策を考える流域治水があるという日本参加青年の話があり、これらの議論の集大成として、最終日に成果発表会を開催している。

また各国参加青年から2名ずつが選ばれ、天皇皇后両陛下の前で気候変動に関するディスカッションを披露し、各国派遣団から団長、代表青年1名、派遣国の大使の合計3名が、天皇皇后両陛下に拝謁して派遣国での活動について報告する機会を頂いた。

6. むすびにかえてー日本参加青年らの成長

事前研修で垣間見えた日本代表青年らの戸惑いの表情や、年齢も立場も異なる12名で意思決定することの難しさは、ドミニカ共和国で過ごす時間と共に解消されていった。それは、単に12名が打ち解け合ったということではない。12名それぞれが、日本参加青年との繋がりの中で、自分はどうような役割を果たすべきなのかを考え、行動できるようになったということに他ならない。そしてドミニカ共和国派遣団の日本参加青年は何かを決めていくとき、常に全

員での意思決定を重んじ、少数派の意見を大事にし、多数決に頼ることはしなかった。時間をかけて深い繋がりをつくっていかうとする日本参加青年の姿勢が見えた。

事前研修やオンラインプレ会議では、英語でのディスカッションに不慣れな青年も多く、外国参加青年の話に頷くだけになってしまうことも多かった。実際、日本参加青年からは英語での議論に不安の声も聞いていた。しかし、派遣準備期間中にはSNS上で「水と防災」に関する情報を共有したり、ドミニカ共和国では常に英語で話す環境に置かれ、UASD学生の熱量に導かれて日本参加青年も多く発言し、英語でのディスカッションは尽きることがなかった。日本参加青年同士の高め合い、UASD学生と日本参加青年との高め合いは、国際社会青年育成事業の醍醐味ともいえる光景であった。帰国後の国際青年交流会議では、何の不安も感じさせない日本参加青年が、英語で議論する姿があった。

さて、ドミニカ共和国に旅をして多くの人と繋がり、お互いを高め合った日本参加青年であるが、青年から次なる目標の話も多く聞いた。それぞれ人生のステージは異なるものの、国際社会青年育成事業に参加して、それぞれの方法で社会課題を見つめ、踏み出すべき一歩を見つけ出したようである。新しくできた安心できる仲間の元を旅立つ日本参加青年の姿は、「旅鳥～繋がり、高め、羽ばたく私達～」という目標を体現してくれている。団長としても、このような機会に関わることができて、とても幸せに思う。

事業評価アンケート

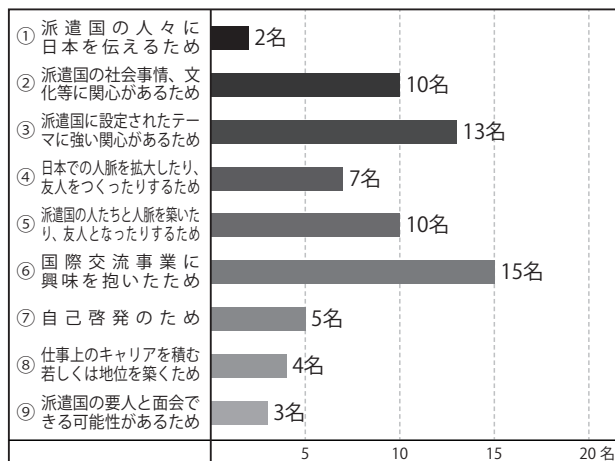
2024年度 国際社会青年育成事業（日本青年外国派遣）

アンケート対象者：団長、副団長、渉外を除く参加青年22名

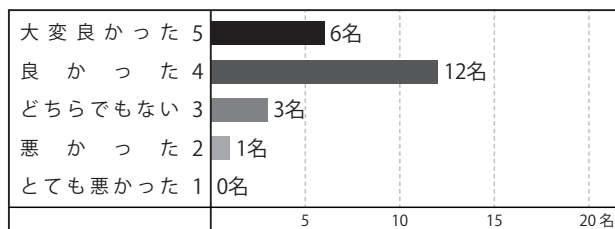
1. 全体評価

(1) あなたは、なぜこの事業に参加したのですか。

（複数回答可）

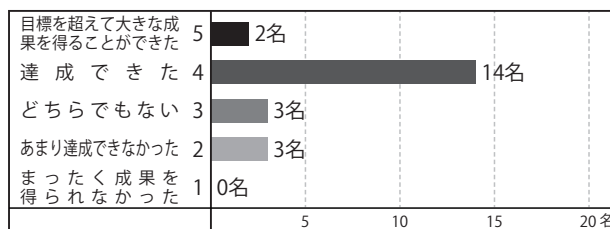


(2) 事業全体をどのように総合評価しますか。



- 旅行では行きにくい地域に派遣することで、青年の視野を広げて将来役に立つ人材となる可能性を高めるという点と、外交官の方が行う外交とは違った形で相手国に日本の存在を意識させる機会を与える点があり、良いと思う。
- 非常に充実した日程だった。派遣国活動も手厚く面倒を見ていただき、現地の交流に専念することができた。事前研修があったことで、相手国についてしっかり学ぶことができ、そこで学んだことを自主研修中に深め、現地で見学し、それを日本での生活に活かすという一連の流れを達成することができたと思う。一方で、現地スケジュールや帰国後のスケジュールが日本青年、外国青年とも過密で、疲労によって十分に楽しむことができなかった参加者もいたので休息日も必要だと思った。

(3) この事業に参加するにあたって、あなたの目標は何かでしたか。また、その目標は達成できましたか。



<再生可能エネルギー>

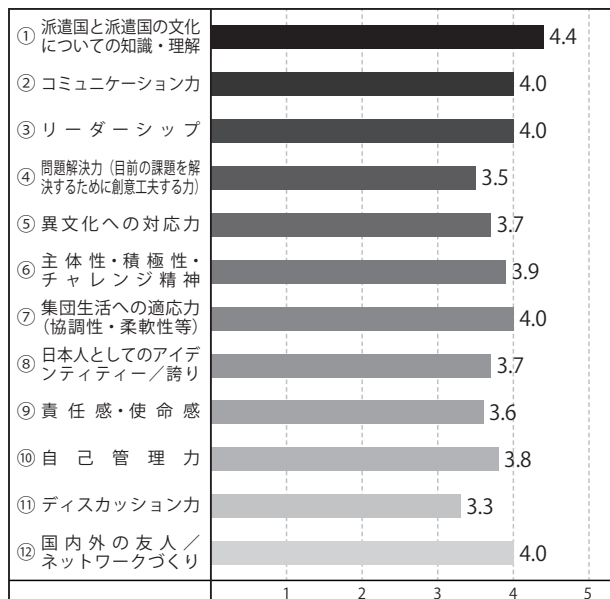
- 視点や強みを見出す能力、共同企画の立案能力、そしてより大きな枠組みとして物事を捉える能力を養うこと。
- 再生可能エネルギーというテーマのもと、好奇心あふれる仲間と過ごすことで自己成長へとつなげることに。

<水と防災>

- 日本以外の水資源・災害に伴う水関連の問題に関する知識を自分の経験から得ること。また、同じプログラムに参加する人々から刺激を受けること。加えて、英語コミュニケーション能力や、チームビルディングの能力を培うことなど。

(4) 以下の①～⑫までに掲げる項目に関し、この事業全体を通じて得られた自らの成長等への効果について、以下の5～1のうち、該当すると思われるものを選択してください。

5：大きな効果があった／4：効果があった／
3：どちらでもない／2：あまり効果がなかった／
1：効果がなかった

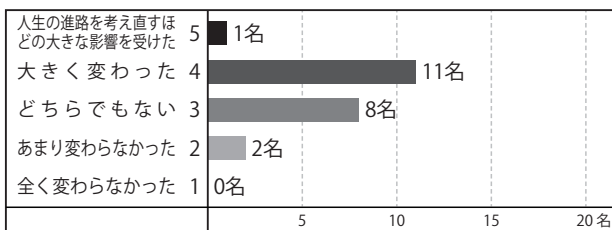


※数値は参加青年22名の平均

(5) 上記(4)に掲げたものの以外で、事業参加によって具体的に得られたものがあれば記入してください。

- ・将来自分がどのように世界のフィールドで活躍したのか熟考する機会になった。
- ・諸外国青年との交流を通じて、自分の考え方やキャリアの設計の仕方を改めて見つめ直すきっかけになった。
- ・問題解決力やディスカッション力については、成長よりも未熟さの方が痛烈に感じた。

(6) あなたはこの事業への参加を通じて、人生、社会などについての考え方が変わったと思いますか。



<再生可能エネルギー>

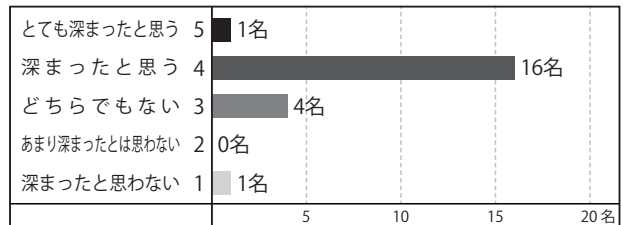
- ・国際的な交流ができ、海外の人とのディスカッションが楽しいと感じたので、外資で働きたいと思うようになった。
- ・まず、様々な高度な機関に訪問することで日本青年として自覚を持つことができた。日本社会との相違点や類似点も感じ取ることができた。また、初めて訪れる大陸、国で得た知見から、私自身が将来どのように世界のフィールドで活躍したいか熟考する機会になった。
- ・正直大きく変わったということはないが、現在の社会で再生エネルギーがどのような進歩を遂げているのか、社会がどのようにシフトしていくのか、そのシフトする大きな原動力となる理由とは何かということをこのプログラムを通じて学ぶことができ、より一層再生可能エネルギーについて関心が深まった。

<水と防災>

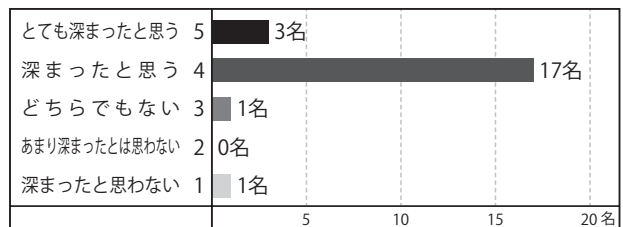
- ・卒業後は決まっている民間企業でのキャリアを積むものだと考えていたが、それも一つの選択肢として他にも人生にはいろいろな道があることを知れた。外交官というものもその一つで、自分には程遠い存在かと思っていたが、大使館の書記官と話す中で、自分にもできるかも知れないと前向きに考えることができた。世界で働くことへの視野が格段に広まった。
- ・物事の視点の捉え方によって意見が違ふことを改めて感じた。特に、事前研修から帰国後研修まで、団別研修等での団員との対話の中で、みんなが違う視点で物事を捉えており、意見の食い違いで話しがまとまらないことが多かった。私自身、食い違いの中で何度も団員の言葉に深く傷ついた。しかし、団での

目標でもある、相手をリスペクトして歩み寄ることを心掛けて乗り切ることができた。この経験は、今後の人生において様々な方と関わる中で大事になってくると考える。

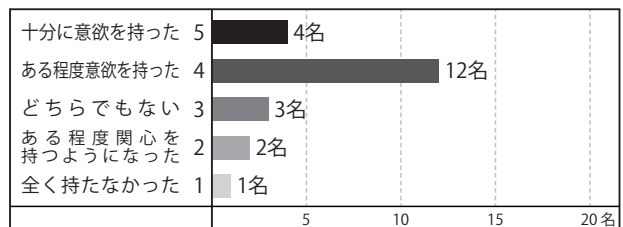
(7) この事業を通じて、あなたと派遣国の人々との相互理解が深まったと思いますか。



(8) この事業を通じて、あなたと派遣国の人々との友好が深まったと思いますか。

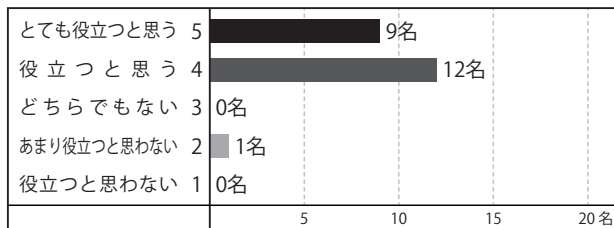


(9) 事業参加を通じて、社会貢献活動を始めたい、参加したいという意欲等を持ちましたか。



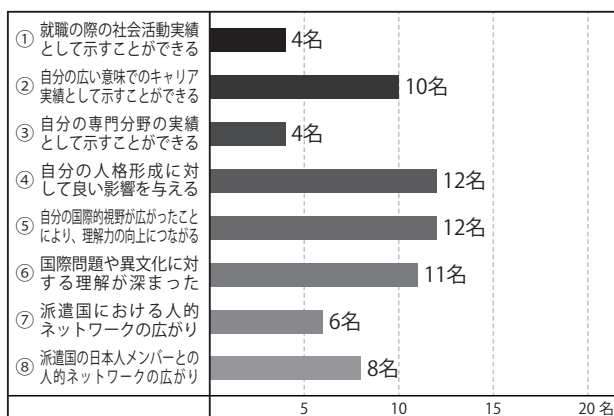
- ・社会問題に真剣に向き合う機会となったので、モチベーションが高まった。
- ・もともと社会貢献活動に対する意欲はあった方だと思っているが、事業に参加することで、世界を舞台にどのように自分が活動できるかという視点での意識がより高まったと思っている。
- ・意欲を持つことができた。多くの人がこのような経験をしてほしいと思う。
- ・既に自身のキャリアを通じて自分の思う社会貢献ができていると感じているが、今後は海外とつながりを持つ青年を育成する側になりたいという意欲が湧いた。
- ・特定の道筋を提示されたり、見つけられたりした訳ではないので「どちらでもない」を選択した。この事業を通して社会貢献活動以外の選択肢の豊富さに気づくことができ、自分が行動を起こす分野・方法の最適化を見つける作業を行いたい。

(10)-1 この事業は、あなたの将来に役立つと思いますか。



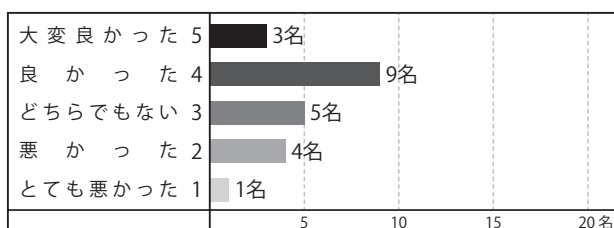
- ・省庁訪問や高度教育機関等への訪問とレベルの高い議論、並びにレベルの高い海外青年との国際交流は非常に刺激になった。
- ・他の日本青年から大きな影響を受けた。特に、意思決定プロセスや、論理的思考力、相手を尊重し合う姿勢が勉強になった。
- ・事業自体で経験した様々なことから新たな考え方を得て、将来のキャリアの選択肢がより広がった。また将来も協働したいと思う人々との人的ネットワークを得た。
- ・このプログラムで得た学びや自信が今後人生において困難に直面した時に、エネルギーや下支えとなってくれると思う。
- ・特に、専門分野の知識を深め、さらなる活動に寄与していくことを改めて決心できた。また、今後は、次世代育成に注力したいと考えるようになったため、IYEOを通じて活動していきたい。

(10)-2 上記において、5～4を選んだ方は、どのように役立つと考えるか、以下の内容から当てはまる項目を選んでください。(複数回答可)



2. 国際青年交流会議（10/1～3）について

国際青年交流会議をどのように評価しますか。



〈再生可能エネルギー〉

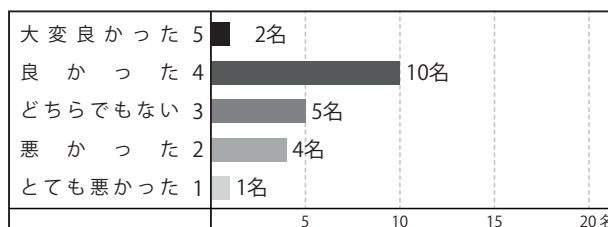
- ・ディスカッションのフォーマットを自分たちに投げてもらえたことが有意義なディスカッションに繋がったと考えている。良い海外青年に恵まれたこともあるが、様々な意見を交えることができ、個人的には非常に満足であった。
- ・事前に日本チームで準備したプレゼンと議題案についてスペインとモロッコの青年たちが考えてくれたおかげで、スムーズに議論が進んだ。スライドのまとめ方やスピーチの仕方に国毎の違いが出たと感じた。発表の時間が7分と短かったため、せめて10分程度あればもう少し良いものができたと思う。

〈水と防災〉

- ・同じグループのドミニカ共和国とジャマイカの青年は、テーマに沿った職に就いている方々が多く、私にとっては青年というより一回り上の先輩という感じだったが、彼らから会議の進行方法や深い知見を学ぶことができた。また、自身も経験は浅いが、広い視点で議論全体を客観視して必要な時に意見出しを行えたと思う。
- ・海外の人とのディスカッションにおける日本人の立場を如実に感じることもできた。また、ファシリテーションのおかげもあり、何とか最後のプレゼンテーションまでたどり着くことができた。
- ・事前に水と防災についてインプットする講義やワークがあったので、知識を持って会議に挑むことができた。一方で、会議の進め方として「ポスターを作る」「プレゼンをする」というゴールが強く前に出すぎたため、特に外国青年にとっては短い時間で成果物を完成させることが最優先されてしまい、肝心の意見交換や議論がスキップされることが多かったように感じる。
- ・学生の主体性を求められたのは非常に有難いが、もう少しロードマップを示してもらえるとよかった。

3. 事前・出発前・帰国後研修について

(1) 研修内容をどのように評価しますか。



(2) 研修の良かったところ、改善すべきところをそれぞれお答えください。

〈良かったところ〉

- ・資源エネルギー庁からの再生エネルギーに関する授業や省庁訪問、関連企業との話し合いがあった点。
- ・時間制限のある中でディスカッションをして最終的に発表するというプロセスが明確であったため、自分の取るべきことが明確になり動きやすかった。
- ・事前研修と出発前研修の間に時間があつたので渡航前に団員とある程度知り合えたことは良かったと思う。
- ・時間の割り振りや休憩時間も適度だった。加えて参加者の自主性や協調性をかなり重んじる対応が良かった。
- ・何も知識がないところからしっかり教育してもらい、派遣国活動が実りあるものになった。

〈改善すべきところ〉

- ・多くの参加者は大学や会社でリーダーシップについて何度も研修を受けていると思われるため、事前研修では不要と思われる研修もあったと感じる。プロトコールなど、必ず押さえないければならない研修に絞った方が記憶に残るのではないかなと思う。
- ・事前はタスクが多く、団員同士がお互いの事を知るための時間を取るのが難しかった。お互いの事を特に知らないままタスクをこなすことを進めなければいけないのがもどかしかった。
- ・全体的に少し長く、間が多いと感じた。特に帰国後研修では1日にまとめられるような内容だったのではないかな。

4. 事業を終了して

(1) 今後、この事業の経験をどのようにいかしていきたいですか。

- ・組織で自分の価値を最大限に発揮すること、リーダーシップについて、積極性や海外への貢献など。
- ・日本青年として、自分が世界のフィールドで貢献していくという自覚が強まると同時に、モロッコやスペインが大好きになったので、これらの国に今後何らかの形で関わり日本と繋げる立場になりたいと思う。また、異なる文化の人と関わる積極性も一層身についたため、今後もその積極性を発揮していきたい。
- ・まだなんとも言い切れない。この事業で学んだこと、感じたこと、思ったことをこれからじっくり時間かけて消化していきたい。
- ・主にIYEO活動を中心に、次世代の青年育成に寄与していきたい。さらには、テーマに基づいた活動にも

積極的に従事し、その道のリーダーとして活躍していきたい。

- ・事業に参加し、ドミニカ共和国、ジャマイカの国への興味関心が高まったので現地での仕事と一緒に関わられるよう企画を立てたい。技術的なことは全くできないが、企画を作る中での交渉相手への理解を深めるという観点からは、自分の経験をいかせると思った。将来、ホームステイなどを受け入れる余裕があるときにできるように今回の経験をいかしたい。

(2) その他、この事業の感想や事業に対する意見・提言があれば記入してください。

- ・本事業の参加青年として選抜していただいたことを非常に嬉しく思う。未熟な自分を選んでもらったことが自信となり、積極的に参加ができたのではないかなと思う。本事業で培った素養をいかして、尽力していきたい。
- ・とても素晴らしい経験をさせていただき感謝しかない。大学時代で一番の思い出になった。ここで止まらず、どんどん新しいことにチャレンジしていきたいので、様々な事業のアナウンスを積極的にしてほしいと思う。
- ・今回のように専門性が高いとは限らない青年を選定・派遣する場合は、海外からの派遣青年とのモチベーションや議論レベルの温度差にもう少し配慮してもらえるとよいと感じた。
- ・不満な点もあるが、全体を通して自分自身楽しく過ごすことができた。再生可能エネルギーというテーマに即して、訪問先や研修内容など、もう少し専門性を高めた方がよいと感じた。

事業の総括評価

2024年度 国際社会青年育成事業（日本青年外国派遣）

I 趣旨

本年度事業の成果を測り、次年度以降の事業に活かすため、日本参加青年を対象として事業終了時にアンケートによる評価を行った。アンケートにおける評価の数値基準は、5段階評価（評価の高い方から5～1）を基本とした。

※本報告書では、日本青年派遣事業に焦点を当てて評価する。

※参加青年に対して行った5段階評価のアンケートの詳細については「資料編」参照。

II 評価結果

1. 事業目的の達成度

①日本と交流相手国の相互理解の促進 [1-(7)]

「この事業を通じて、あなたと相手国の人々との相互理解が深まったと思いますか」との問いに対して、日本参加青年のうち5段階評価の4（深まったと思う）以上と回答した者は77.3%であり、全体の8割近くが相互理解が深まったと評価した。

②日本と交流相手国の友好の促進 [1-(8)]

「この事業を通じて、あなたと相手国の人々との友好が深まったと思いますか」との問いに対して、日本参加青年の90.9%が5段階評価の4（深まったと思う）以上と回答。全体の9割を超える者が相手国の人々との友好が深まったと回答し、高い評価であった。

③社会貢献活動への意欲 [1-(9)]

「事業参加を通じて、社会貢献活動を始めたい、参加したいという意欲等を持ちましたか」との問いに対して、5段階評価の4（ある程度意欲を持った）以上と回答した者は72.7%であり、一定の評価があった。

④事業参加による参加青年の将来への影響 [1-(10)-1]

「この事業は、あなたの将来に役立つと思いますか」との問いに対して、日本参加青年の95.5%が5段階評価の4（役立つと思う）以上と回答し、極めて高い評価であった。

⑤事業参加による目的の事前設定と達成状況 [1-(3)]

「この事業に参加するにあたって、あなたの目標は何でしたか。また、その目標は達成できましたか。」との問いに対して、日本参加青年の72.7%が5段階評価の4（大きく変わった）以上を付け、一定の評価があった。

Ⅲ 総括評価

最後に、アンケートの総合評価を含めて、今回の総括評価をまとめる。

「事業全体をどのように総合評価しますか[1-(2)]」との問いに対して、日本参加青年の81.1%と全体の8割を超える者が5段階評価の4(良かった)以上と回答し、全体としては高い評価が得られた。続く自由記述欄では、事前研修から継続する一連のプログラムにより派遣国についての学びを深められたといった声、日本と派遣国それぞれの政府機関やテーマに関連する施設など、普段の生活では行きにくい場所へ訪問できた経験が有意義だったとの声、それぞれに個性的な日本人メンバー同士の出会いと学びあいが有意義だったといった声があった。一方で、一部プログラムにおいてテーマに関する学びの深化や外国青年との交流機会が物足りなかったとの声もあり、次年度以降の事業の実施に向け、改善を図ってまいりたい。

事業を終了しての今後の展望として、「今後、この事業の経験をどのようにいかしていきたいですか。[4-(1)]」との問いに対して、日本参加青年からは、日本青年として自分が世界のフィールドで貢献していくという自覚が強まったといった声、テーマに関して日本よりも進んだ取組がある国を訪問できた経験を自分のキャリア形成に活かしたいといった声、事後活動組織において次世代の青年育成や、テーマに基づいた活動に積極的に従事し、その道のリーダーとして活躍していきたいといった声など、前向きなコメントが多く寄せられた。

以上、日本参加青年による評価結果を総括すると、全体として、日本参加青年は、テーマに沿ったプログラムを通じて、世界的な社会課題の解決に貢献する人材としての素養を高めたと言える。さらに、将来は、事業で得られた学びを糧に、それぞれのフィールドの中で、リーダー的存在として指導性を発揮しつつ活躍していくことが十分に期待できることから、本事業の目的は達成されたものと評価できる。

資料編

日本参加青年一覧

外国参加青年一覧

スタッフ一覧

研修日程表

実績

研修日程

2024年度 国際社会青年育成事業（日本青年外国派遣）

【事前研修】

研修会場：国立オリンピック記念青少年総合センター

	第1日目	第2日目	第3日目		第4日目
月日	7月3日	7月4日	7月5日		7月6日
曜日	(水)	(木)	(金)		(土)
8:30					チェックアウト
9:00		副団長・渉外ミーティング	副団長・渉外ミーティング		
9:30		プロトコール講座	団別研修		移動
10:00		移動			団別研修
10:30	団長・副団長会議	派遣国に関する講義			
11:00					
11:30		団別研修	テーマ別講義		団別研修
12:00					
12:30	参加青年受付	昼食	昼食	昼食	
13:00					
13:30	開講式		ディスカッション講座		事後活動について
14:00	内閣府からの説明	大使館訪問			閉講式
14:30	オリエンテーション				
15:00	休憩				
15:30	チームビルディング講座			事務連絡	
16:00					
16:30	荷物回収&チェックイン	団別研修 (内閣府からの派遣国説明)	各派遣団長からの講義		
17:00					
17:30					
18:00	夕食	夕食	夕食		
18:30	団別研修		自主研修	団長・副団長 会議	
19:00		渡航に関する説明			
19:30					
20:00	自主研修	自主研修			
20:30					
21:00					
21:30					
22:00					

【出発前研修】

※研修会場：都市センターホテル

	オンライン1日目	オンライン2日目
月 日	7月14日	8月3日
曜 日	(日)	(土)
8:30		
9:00		
9:30		
10:00	オープニング	オープニング
10:30	団別研修	団別研修
11:00	休憩	団別研修
11:30	OB・OG 意見交換会	休憩
12:00		団別研修
12:30	団別研修	
13:00	クロージング	クロージング
13:30		
14:00		
14:30		
15:00		
15:30		
16:00		
16:30		
17:00		
17:30		
18:00		
18:30		
19:00		
19:30		
20:00		
20:30		
21:00		
21:30		
22:00		

	第1日目	第2日目	第3日目
月 日	9月19日	9月20日	9月21日
曜 日	(木)	(金)	(土)
8:30			モロッコ派遣団 ドミニカ共和国派遣団
9:00		副団長・ 渉外ミーティング	6:30 研修会場発 11:15 研修会場発
9:30			↓ 7:00 羽田空港着 11:45 羽田空港着
10:00			↓ 9:05 羽田空港発 (AF163) 15:50 羽田空港発 (UA130)
10:30		団別研修	
11:00			
11:30			
12:00			
12:30		昼食歓送会	
13:00			
13:30	受付 準備	移動	
14:00			
14:30	オリエンテーション		
15:00			
15:30	移動・休憩	団別研修	係別ミー ティング
16:00	派遣国活動について 内閣府からの説明 (派遣団別)		
16:30			
17:00	渡航に関する説明		
17:30	チェックイン	事務連絡	
18:00			
18:30	夕食	団長・ 副団長 会議	夕食
19:00			
19:30			
20:00	団別研修	自主研修	
20:30			
21:00			
21:30			
22:00			

【帰国後研修】

※研修会場：都市センターホテル

	第 1 日目		第 2 日目	
月 日	10月4日		10月5日	
曜 日	(金)		(土)	
8:30	副団長・渉外ミーティング		チェックアウト	
9:00			移動	
9:30	団別研修	係別ミーティング	全体会	
10:00			事後活動について	
10:30				
11:00			休憩	
11:30			成果発表・解散式	
12:00	解散			
12:30	昼食	海外旅行保険の 申請		
13:00				
13:30	団別研修			団長・副団長会議
14:00				
14:30				
15:00				
15:30				
16:00	評価会			
16:30				
17:00				
17:30	休憩・移動			
18:00	招へい青年歓送会			
18:30				
19:00				
19:30				
20:00				
20:30				
21:00				
21:30				
22:00				

国際社会青年育成事業 (日本青年外国派遣)

発行：内閣府

〒100-8914

東京都千代田区永田町1-6-1

TEL：03-6257-1435

URL：<https://www.cao.go.jp/koryu/>

編集：一般財団法人 青少年国際交流推進センター

〒103-0013

東京都中央区日本橋人形町2-35-14

東京海苔会館 6 階

TEL：03-3249-0767

URL：<https://www.centerye.org/>

印刷：株式会社 長正社

